

将来像1：デジタルからデザインへ～脱デジタル宣言～

雄大な磐梯山をいつもと変わらず眺めながら、町民がいつもと変わらない日常を送っています。町民誰もが意識しないところで、デジタル技術がインフラとして活かされています。そんなパブリック（地域、社会、役場、施設等）のデザインを行なっていきます。

さて、磐梯町では、DXやCDOのDは、「デジタル(Digital)」だけではなく、「創造的破壊(Disruption)」、「データ(DATA)」そして「デザイン(Design)」を表すものとして捉え、CDOを中心に取り組みを進めてきました。デジタル変革推進当初は、職員間のデジタル技術の活用とリテラシーの向上(デジタル)、既存の価値観と取り組みの抜本的な見直し(創造的破壊)に重きを置いてきました。

しかし、デジタル変革戦略室を中心にデジタルネイティブな組織運営が常態化し、各課にそれらの取り組みが波及する段階になった現在、より重視されるべきは「データ」であり「デザイン」の役割です。そこで、本戦略では改めて何のためにデジタル変革を推進するのかという本質的な部分に力点を置くと同時に、それらを実現するためのデザインを重視する姿勢を明示します。

また、磐梯町では「デジタル技術は手段であって目的ではない」という基本姿勢を徹底しています。また、期限を区切って「変革」を成し遂げるという強い意識でデジタル変革に臨んできました。したがって、「デジタル変革」という言葉が磐梯町の行政文章に見られる限りは、その変革がなされていないということになります。

そこで、情報インフラ・システムの更新、職員・町民のリテラシーの向上、各種環境整備等の目処が示されることを条件として、「脱デジタル宣言」を実施し、3年間の時限組織であるデジタル変革戦略室の意義を再確認し、不退転の覚悟で取り組みを進めていきたいと考えます。

※インフラ：上下水道・道路など、生活や経済活動に不可欠な社会基盤、ここではインターネットやパソコン・スマートフォンなどのデジタル技術を社会基盤に含めている

※パブリック：公共

※CDO：最高デジタル責任者(Chief Digital Officer) 磐梯町のデジタル化を推進する最高責任者

※リテラシー：あるものを活用する能力、ここではデジタル技術を使いこなす能力

※デジタルネイティブ：若いころからデジタル技術や機器に慣れ親しんできた世代、ここではデジタル技術を使いこなすのが普通という意味合い

1. 将来像 1

デジタルからデザインへ～脱デジタル宣言～

①戦略1：デジタル→デザイン

磐梯町にかかるあらゆる事象を「役場本位」から、「町民本位」「職員本位」に再構築するために、「デザイン」をDX推進の重要な要素として位置づけます。まず、「脱デジタル宣言」において、その方向性を町内外に明示します。また、デザイン機能を強化することで、デジタル変革推進にかかる体制整備を拡充します。

具体的な戦術

- ・「脱デジタル宣言」を実施します。
- ・最高デザイン責任者を設置します。

②戦略2：情報共有の再デザイン

徹底的な情報公開を前提に、磐梯町を取り巻くステークホルダーに対して、適切な情報を共有できる仕組みを再デザインします。まず、「(仮称)広報・PR・マーケティング戦略」を策定し、混同されている概念を整理し、情報の導線を再デザインします。また、情報発信の主要な手段であるホームページ、広報誌(磐梯弘報)のあり方を戦略に基づき、抜本的に見直します。さらに、住民の代表である議会への情報共有の仕組みも再デザインします。

具体的な戦術

- ・「(仮称)広報・PR・マーケティング戦略」を策定します。
- ・ホームページ、弘報を抜本的に見直します。
- ・議会への迅速な情報共有の仕組みを構築します。

③戦略3：パブリックデザインの体系化

社会、地域、役場、公共施設、公共物等、公に関わるあらゆる事象に関するデザインをパブリックデザインと呼称し、DX推進の中核に位置づけます。そこで、パブリックデザインの概念を体系化し、方針を策定します。

具体的な戦術

- ・パブリックデザインに関する体系的な方針を策定します。

※マーケティング：ここでは、

「サービス対象者を定義し、その対象者本位の価値の創造・伝達・提供を通じ、対象者との良好な関係を維持・育成することにより対象者と磐梯町双方の利益を追求すること」と定義する。